026-Te147z
*00495371 *

善本寫眞集十三

古俳書二

天理圖書館

目次

一 芭蕉行脚之圖　許六
二 貝おほひ　宗房
三 桃青三百韻
四 俳諧　合　其角・杉風
五 俳諧次韻　桃青
六 波留濃日荷兮
七 蠹集　其角
八 孤　松　尚白
九 奥の細道　芭蕉
一〇 猿蓑　去來・凡兆
一一 誹諧書籍目錄　阿誰軒
一二 雪芝宛芭蕉書翰　芭蕉
一三 浪化日記集　浪化
一四 ゆずり物　杜旭
一五 花見車　轍士

911.3031
026
Te147z

本集は、蕉風俳諧を以て、古俳書一(第三集)の貞門・談林篇につぐ。芭蕉とその俳風の生長を主題として、必ずしも純正蕉風のみに限らなかつた。所謂俳書の善本とは何か。一應俳諧史上の古典にして、しかもやや稀覯に屬するもの。今その十五點を、年次により排列した。

国立国会
34.8.10
図書館

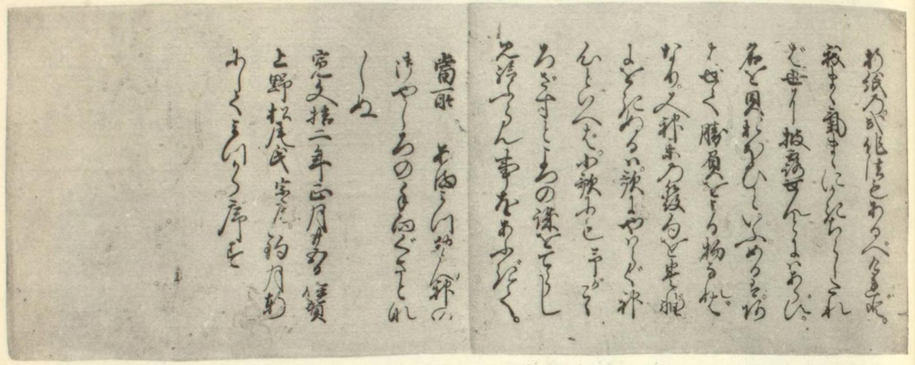
495371

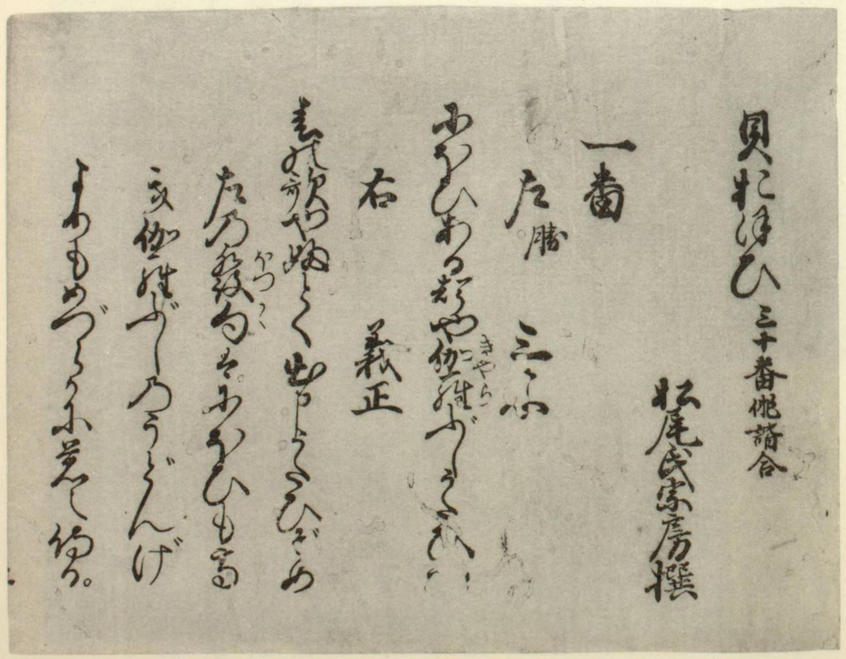
一　芭蕉行脚之圖

彦根藩士森川許六（明暦二年―正德五年　一六五六―一七一五）は、元禄五年秋江戸在勤中、芭蕉に入門。生來多藝多才の彼は、狩野流を學んで特に畫技に秀で、蕉門隨一の觀があつた。その俳文旅賦によれば、芭蕉庵を訪ねての雜談中、望まれて旅十體の圖を描いたといふ。多少の獨斷が許されるとすれば、本圖は奥の細道にあたるものであらうか。いづれにしてもこの風貌は、信ずべき芭蕉像のすべてに共通し、しかもそのどれよりも更に芭蕉的である。とすれば、隨行する今一人の僧形を、像の寫實性はともかく、勿論曾良としなければならぬ。

識語の元禄癸酉六年春は、恐らく許六在江戸中で、この畫幅が芭蕉自身の一覽を經たと考へるのもあながち空想ではあるまい。畫は取つて予が師とすといふ讃辭を含めた送別の一文柴門之辭を芭蕉より贈られ、郷國に旅立つたのも、この夏のことであつた。

料紙は、縦八八糎、横二八糎の黄唐紙、一幅。面部等纔に薄朱の單彩を施す。題簽には、後筆で五老井筆桃青行脚之圖とある。

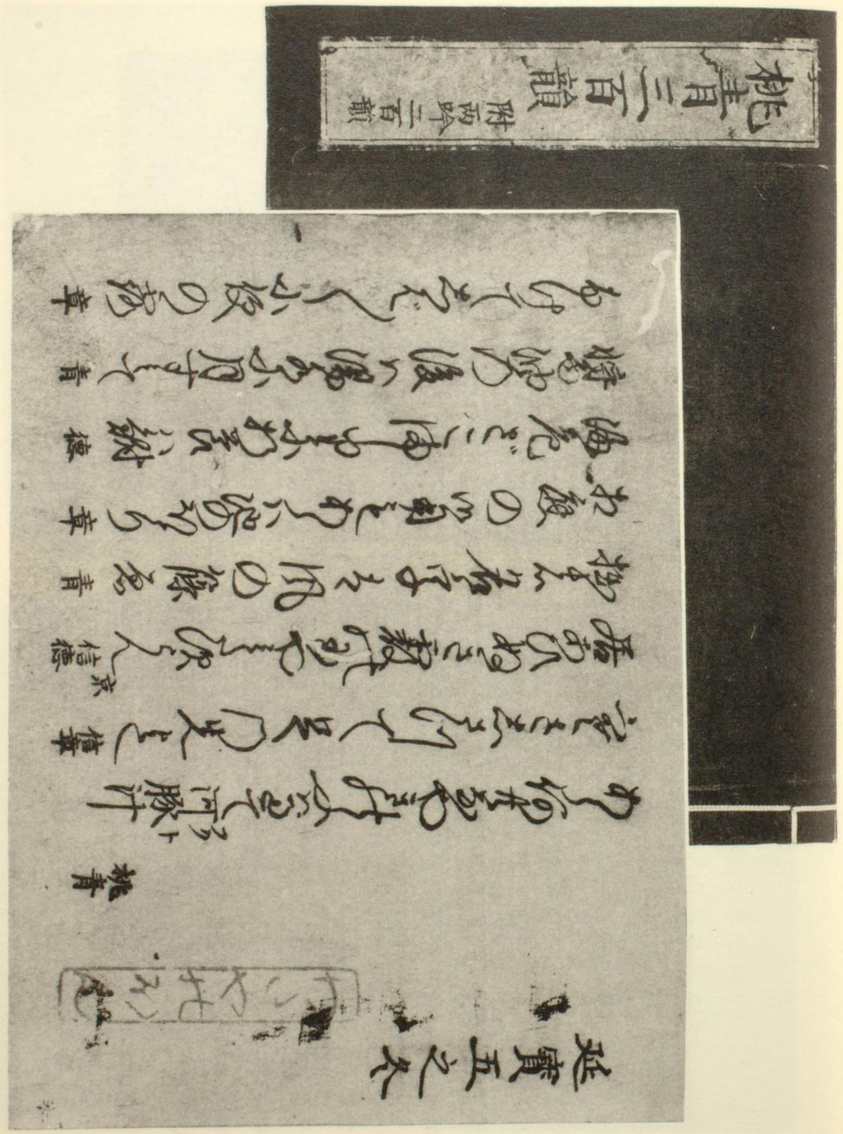




二　貝おほひ

左右三十番、都合六十の句合に判詞を添へた貝おほひ一部を、郷土伊賀上野の氏神天滿宮に奉納したのは、寛文十二年(一六七二)の、しかも初天神の正月二十五日。時に撰者宗房は二十九歳。自句をも交へるが、むしろ作者としてより、判者の身分に於て多くこの試みに參加してゐる。形は堂上的な歌合に倣ひつつ、當世風な、何よりも當世風な俳諧の句合を遊ぶ—都雅と卑俗との斷層が本書の文學となつてゐる。芭蕉(正保元年—元祿七年 一六四四—一六九四)は松尾氏、伊賀上野藤堂家に仕へた下級武士の出で、宗房はその頃の名である。當時流行の小歌節や惡所遊里の詞章に混つて、本書に散見する放埒の言は、行文の餘勢もあらうが、彼が若き日の祕密をおほひ得るものではない。若輩にして貝おほひ一篇の撰者となり得た才氣は、幾變遷を經て、やがて寂びとしをりの世界に沈潛していつた。

横本一冊。刊記、中野半兵衞開板。本書の初版と思はれるものの寫本によれば、この版元は江戸。版本貝おほひは、昭和十年始めて掲出本が發見されて以來、なほ第二本の出現を報告されてゐない。

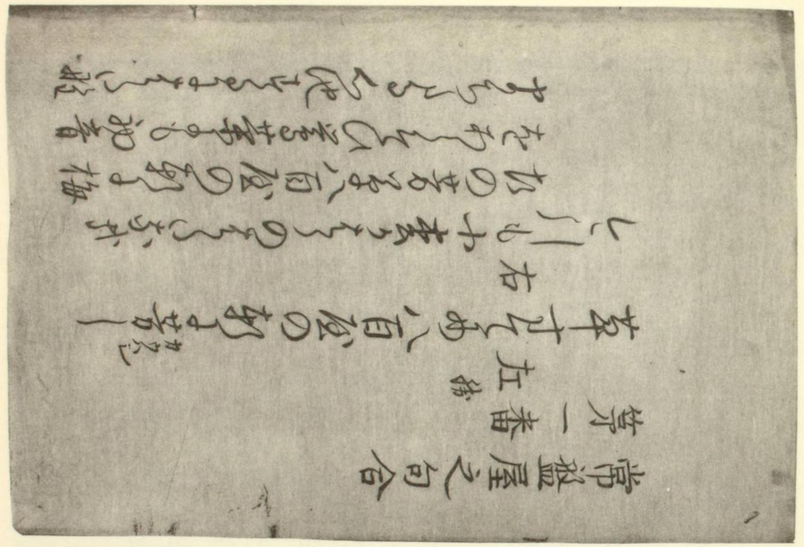


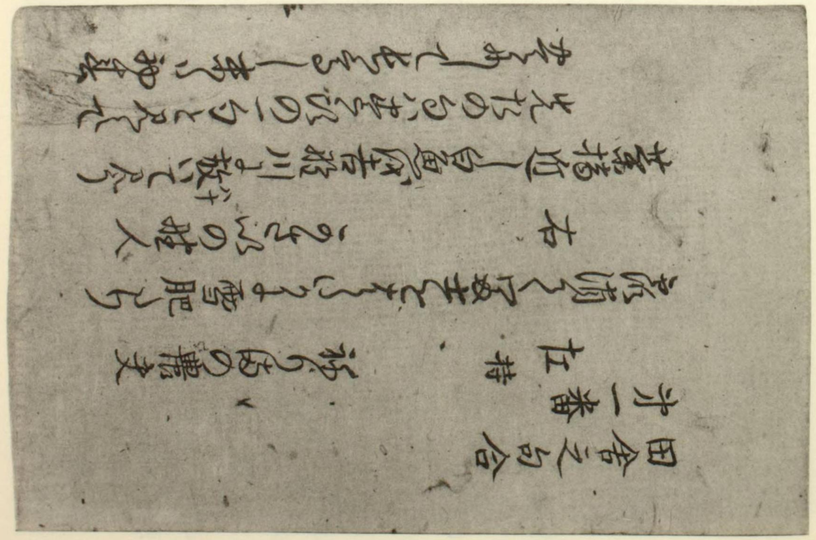
三　桃青三百韻

宗房から桃青への改號は、延寶初年江戸出府當初のことであらうが、大江戸の風儀を、田舍俳諧出身の彼はいかに受取つたか。早々延寶三年の夏、折から東下中の宗因の俳諧に一座し、その風躰に關心を示したことに始まつて、以降交友圈は概ね新流の側に屬し、しかも江戸の作者達に伍して少しも引かぬ實力の程を、一一の作品に示してゐる。

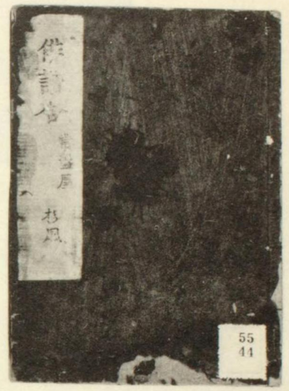
延寶四年初春、桃青は終生の心友山口信章と奉納兩吟二百韻を興行、即ち江戸兩吟と呼ばれてゐる。ついで翌五年、偶々東下した京都の作者伊藤信德を迎へ、冬から翌春にかけて、信章と共に百韻三卷を興行、所謂江戸三吟である。この兩度の俳諧は、それぞれ一書として刊行、流風は勿論宗因流談林である。

横本一册。刊記、神田堅大工町書林山内氏長七開板。前述の兩吟・三吟を收めるが、題簽の書名から、本書を桃青の自撰とみるのは危險で、彼の名にかつた書肆の一商策か。とすれば、既にして當時江戸俳壇に於ける桃青名義の重さは察するに餘りがある。





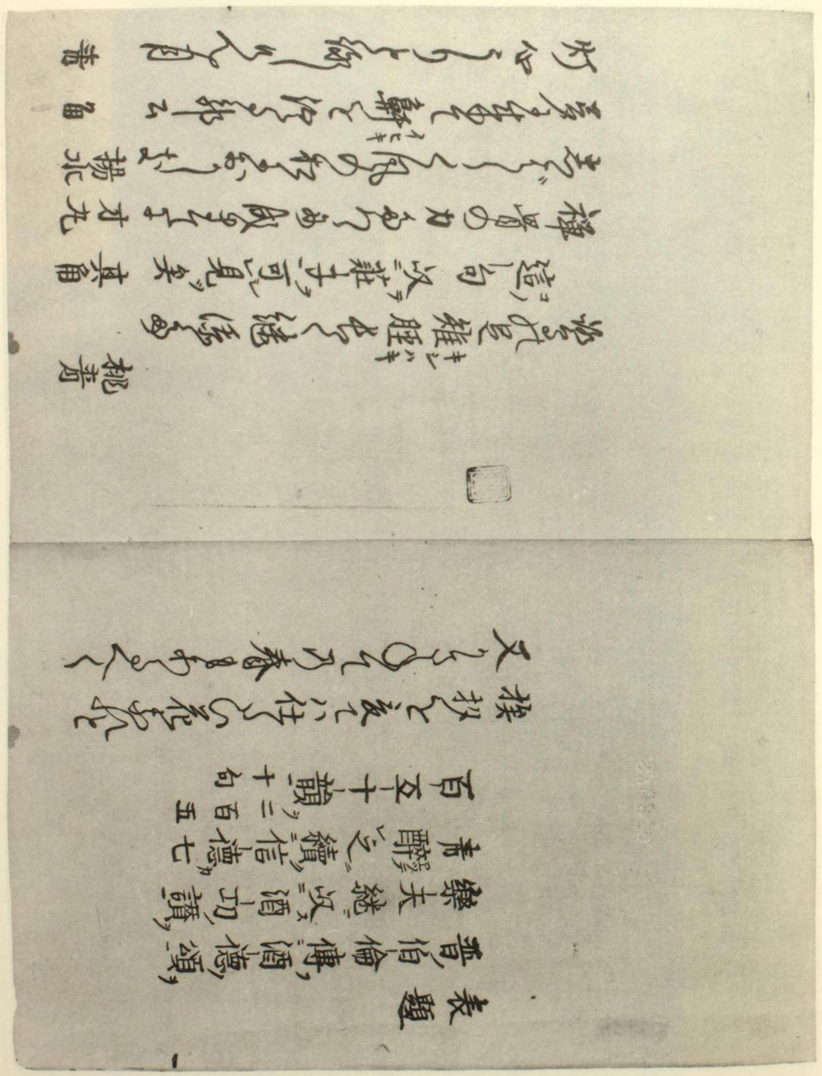
四　俳諧合



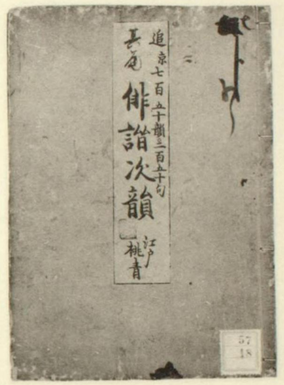
延寶八年の桃青門弟獨吟廿歌仙刊行は、江戸俳壇に於ける芭蕉の隱然たる勢力を誇示したことになる。杉風・其角いづれも二十人中での出頭であつた。杉風の杉山家では、俳事に限らず、早くから芭蕉身邊のことを周旋して特に昵懇であり、この交に於ける其角は、未だ二十歳の青年、早熟の才は、却て師翁よりも華やかでさへあつた。

其角は、自らを練馬の農夫と葛西の野人に假托して、自句二十五番を左右に分けて合はし、判を芭蕉に乞ひ、題して田舍之句合といふ。又、杉風の常盤屋之句合も前書に同巧異曲、青物を題としての自句二十五番合せ、判者これ亦芭蕉である。兩書一對、あはせて俳諧合といふ。

中本、各一冊。ともに其角筆の板下。田舍之句合には、嵐雪の序と栩々齋主桃青漫採毫判の奥書、常盤屋には、杉風の序と于時延寶八庚申季穐日華桃園と識した芭蕉の長文の跋がある。兩書通じて發句は殆どが字餘り、才にまかせての漢文くづしの判詞―延寶末年に於ける新興蕉門のたくましいエネルギーが溢れてゐる。

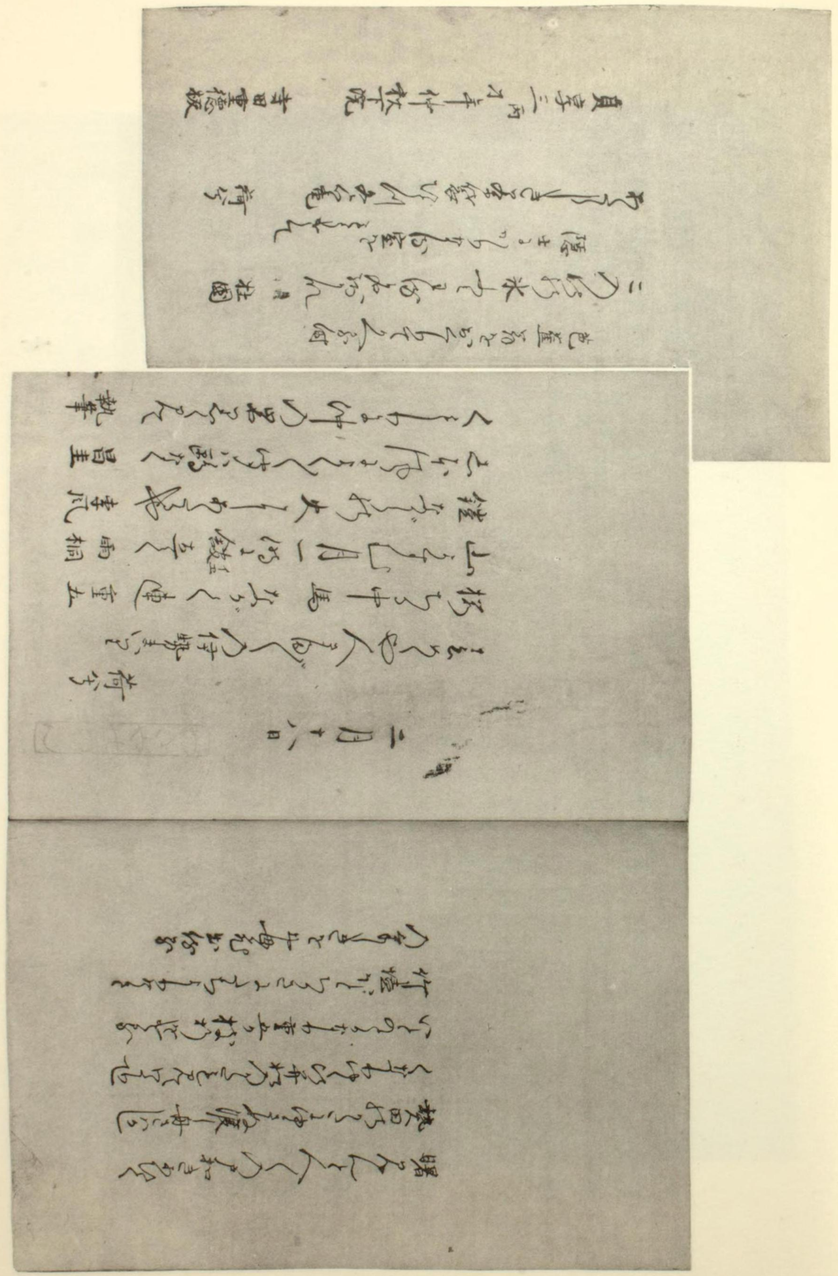


五　俳諧次韻

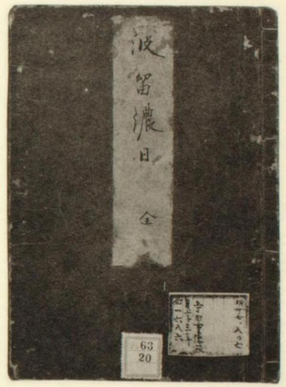


上方俳壇でも、延寶年度後半期に及んで、貞門・談林兩派の圏外にたつ、信德達を中心とした第三勢力が擡頭する。延寶九年、信德の七百五十韻はその一成績であつた。芭蕉は、上方の俳諧に無關心ではなく、京都の七百五十韻に二百五十句を追加し、千句の定式を滿たすといふことに於て、遠方の同志達へ、共感と好意を示さうとした。本書題簽の追京七百五十韻二百五十句とはこの意味。次韻とは、勿論中國の詩法にとつたもので、書名に於けるこの唐山趣味は、單にそれのみの問題でなく、本書のすべてに係はる。漢詩文風な、特に老莊的な風狂・隱逸への傾倒によつて、俳諧の方法を發見しようとしたのである。連中は、桃青・其角・才丸・揚水の四人。半紙本一冊。題簽書名の下に江戸桃青と刻したことにも、その衒氣がほのみえよう。刊記、延寶九歳次辛酉夷則下旬　寺田重德行梓。板下は其角筆。

495371



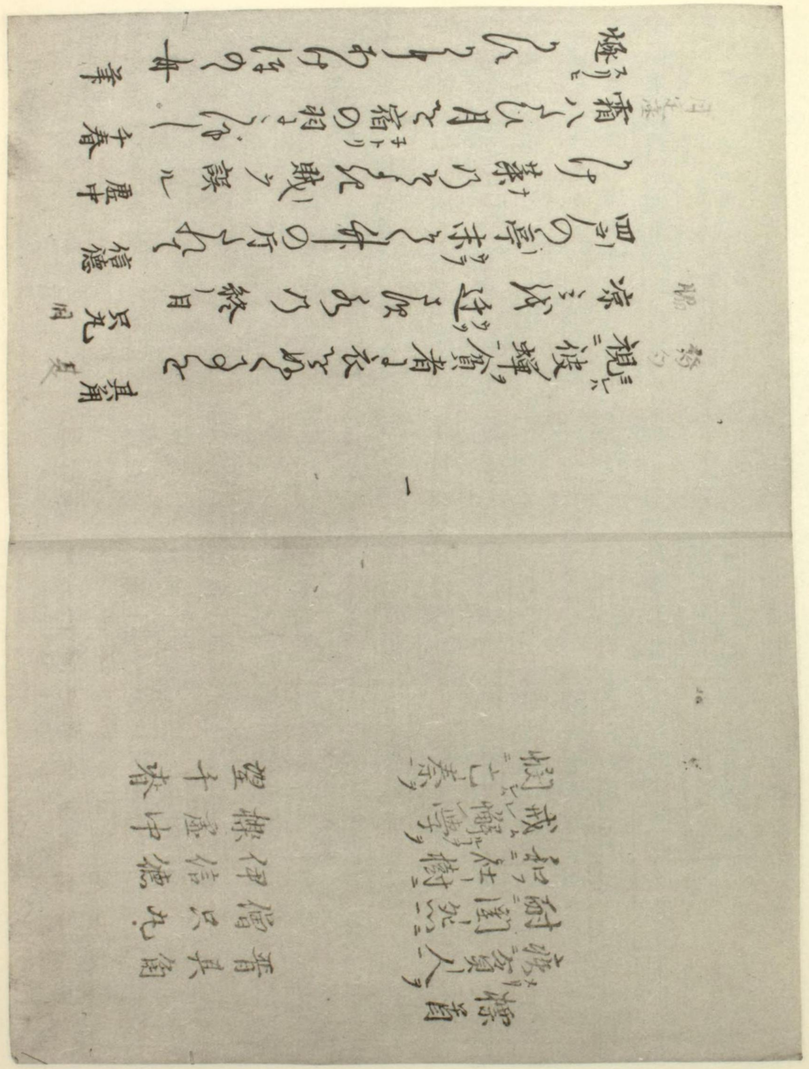
六　波留濃日



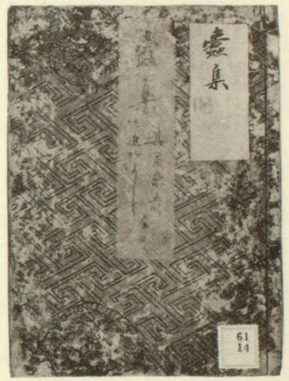
俳諧七部第二集波留濃日(春の日)は、初集貞享元年の冬の日と同じく、尾張の荷兮(慶安元年―享保元年一六四八―一七一六)撰、二日互に姉妹篇とすべきものであらうか。先集のもつ、苦しいまでの昂ぶりや、稚拙生硬の句作りも、二年後の本集ではかなり平常に歸し、續くひさご・猿蓑の出現を豫言してゐる。

享保時代は、芭蕉歿後ほぼ五十年、直弟の殆どは世を去り、芭蕉への忘却と回顧が共存し、更に元祿蕉門の古俳書が、流派を越えて古典化した時期、七部集の撰定もこの一現象といへる。七部集は概ね井筒屋版で、その板木は長らく家藏され、以降都度後刷されてゐた。但し、春の日の初版は、元祿以後には退轉したらしい寺田の版で、從つてその板木も早く失はれた筈である。享保度多くの元祿俳書を飜刻した西村市郎右衞門は、寺田の初版を模刻刊行することによつて、この期の氣運に投じようとした。卽ち西村版春の日で、久しく初版に誤られてきた。

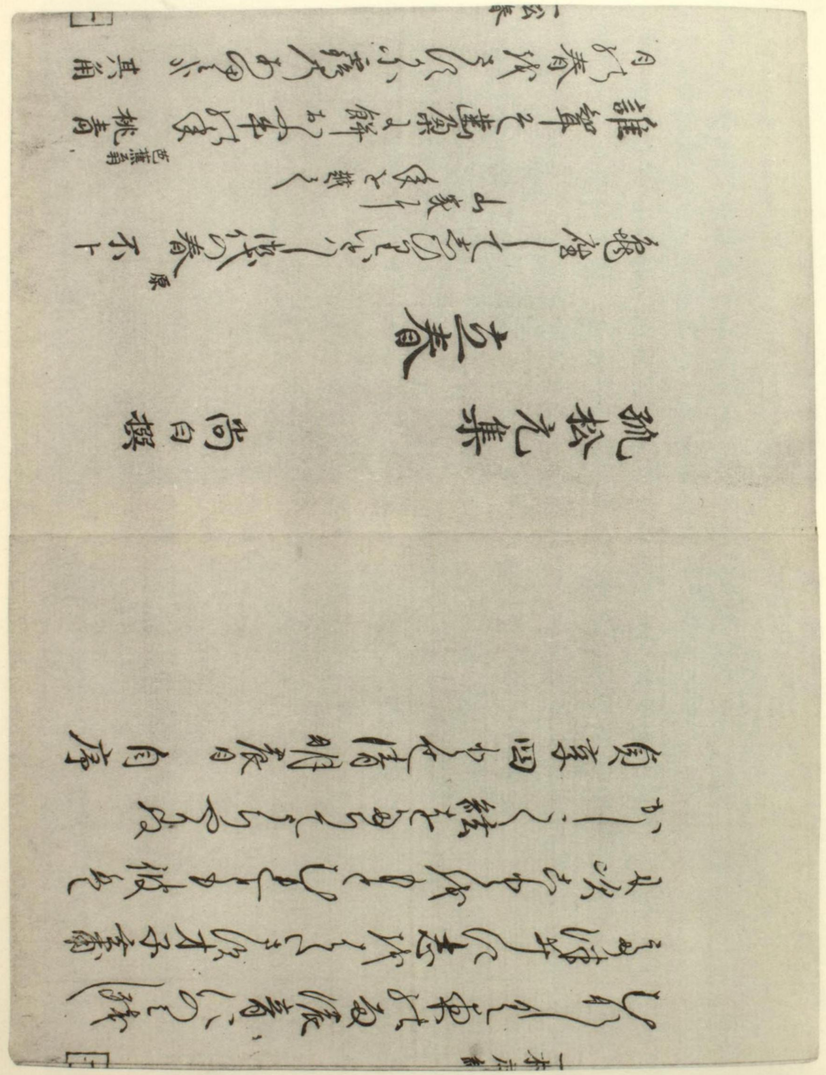
半紙本一冊。刊記、貞享三丙寅年中秋下浣　寺田重德板。板下も亦重德筆。



七蠹集

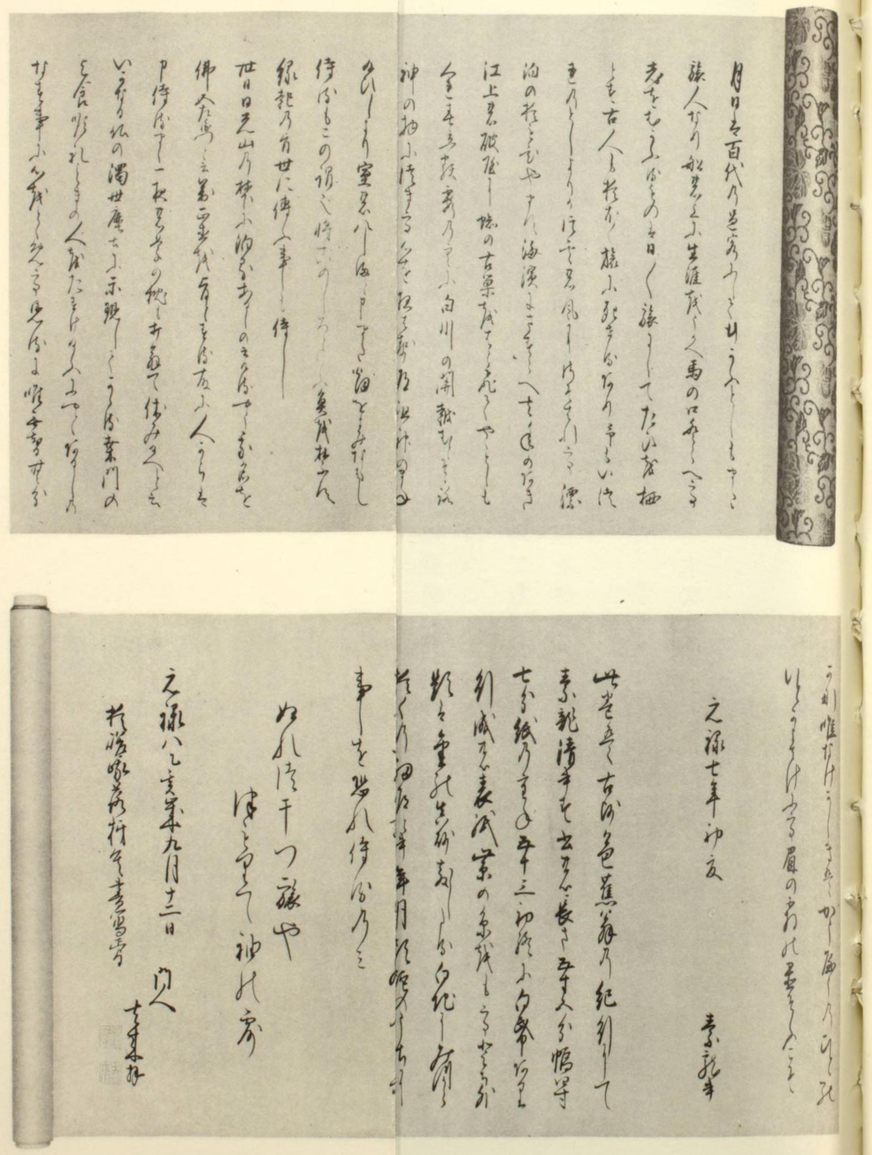


貞享元年六月五日、西鶴の二萬三千五百句大矢數に一座してその後見を勤め、いはば談林俳諧の壯麗な最後を見届けた其角は、同年秋、京都で、只丸・信徳・虚中・千春と五吟五歌仙を唱和、それに四十四一卷を追加して都の家土産とした。即ち本書である。この年は、七部第一集冬の日・蠧の兩集が、共に五つ諸史上に顯著する。冬の日・蠧の兩集が、共に五つの歌仙を收めたのも奇縁であるが、尾張衆に京衆、且つ芭蕉と其角といつたことが、二集の間にあれ程の差等をつけたのであらうか。其角は天和の虚栗世界に安住し、貞享の芭蕉は、既に昨日の我に倦くとして虚栗の名をあげて之を否定する。半紙本一册。雷紋に卷龍模様の表紙は、この頃西鶴などの草紙類にもみられる新意匠で、俳書にこれをとつたのも其角の派手な好み、題簽と序文の印刷には、特に綠墨を使ひ珍奇を誇つてゐる。貞享甲子中元日蘓鐵林千春序。刊記、寺田与平治重德板行。板下、其角筆。

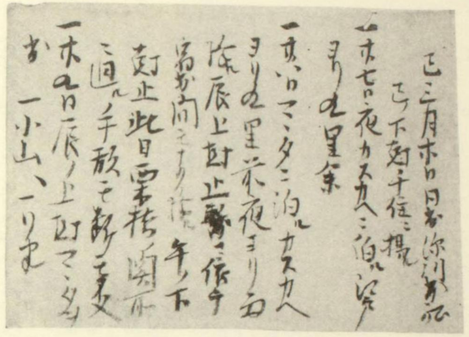


八孤松

野晒の旅以後、江州湖南地方は、尙白を中心として
おもむろに蕉風に傾いていつた。貞門の頃、一書に
敢へて數千句を收めた大部の俳諧撰集も、俳諧自體
が漸く玄人化して、偏奇好事にのみ奔つた談林時代
には、書形も次第に小規模なものとなる。貞享四年
春尙白撰の孤松集は、跋文によれば「大凡句の數二
千五百二唱、作者三百七人、在所は二十七落、國は
一十四州」と。芭蕉時代を通じての大集で、尙白努めたりとすべきであらう。尙白
(慶安三年—享保七年
一六五〇—一七二二)は江左氏、大津の醫で、貞德を慕ひ、京都談林の高政等に親しく、
原不卜を師とした。本書に、芭蕉に先んじて不卜を卷頭としたのもこれによる。撰
者の經歷からして、入集の作者は蕉門に限らず、多彩である。乙州を始め近江連中、
或は萬子等の加賀北陸等の諸地盤は、やがて芭蕉を受入れる溫床ともなつた。
半紙本四册。貞享四年自序。刊記、丁卯歲春三月二十五日　井筒屋庄兵衞重勝梓行。



九奥の細道

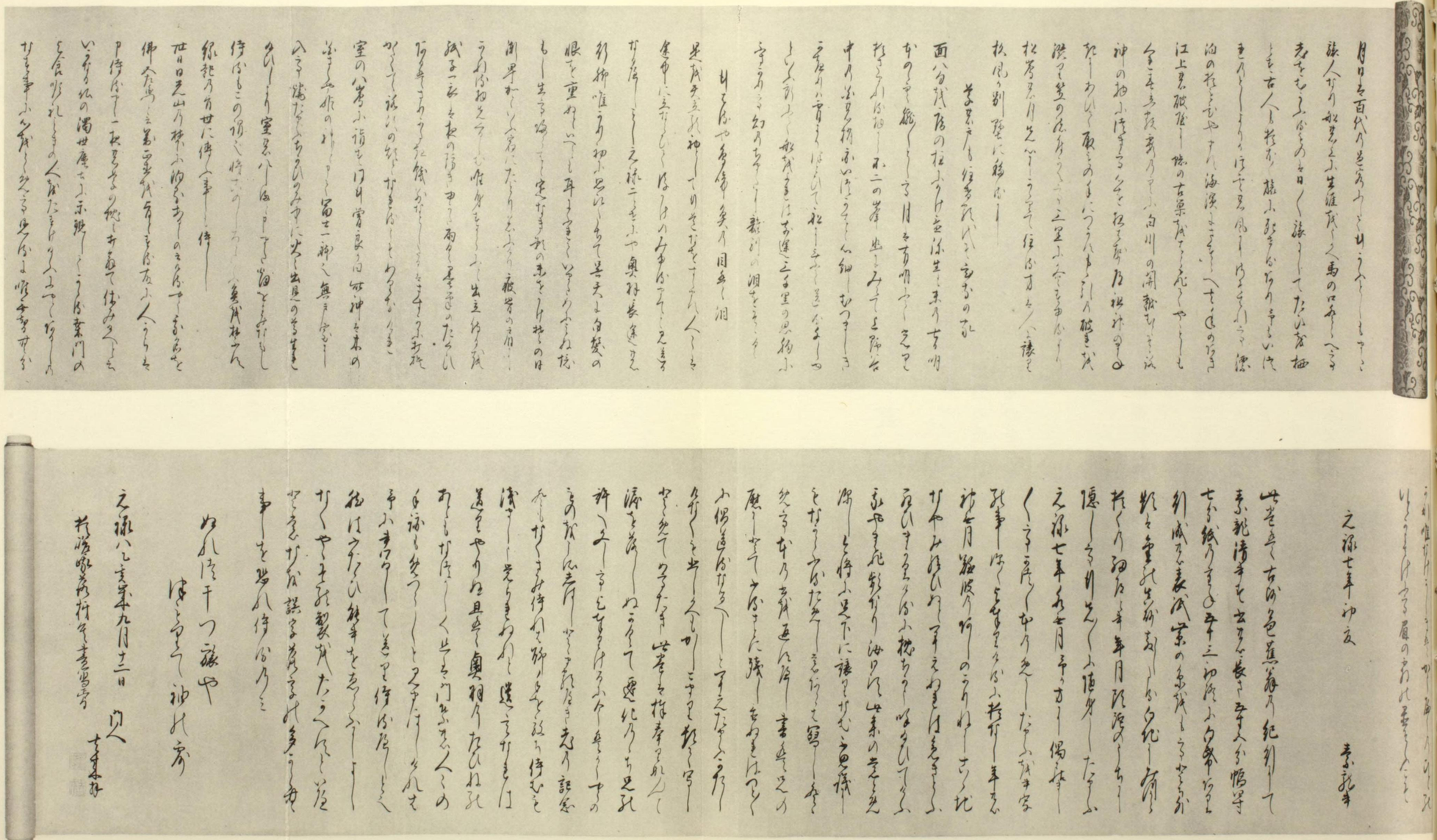


本文を上代様筆蹟の名手素龍に清書せしめ、題簽は自から筆をとつておくのほそ道と記した桝形本一冊、所謂素龍本細道を頭陀に収め、元禄七年五月、上方に旅だつた芭蕉は、十月大阪の旅舎に病み、その十二日に歿。途次伊賀の家兄半左衞門の許に殘してきた細道を、片身として去來に贈ることを約した。遺言により素龍本を讓られた去來は、替りに、すべて本に從つて細道を手寫し、元禄八乙亥歳九月十二日の奥書を附して半左衞門に届けた。これが伊賀に傳來の所謂去來本である。

掲出本は幅三四・五糎、長一七米二四糎、牙軸金襴表紙、かり深い尾張鳴海の下郷家に傳來した去來筆本。奥書の日附が伊賀本に同一であることは、囑に依り、新にもとのまま再寫したものとすべきか。

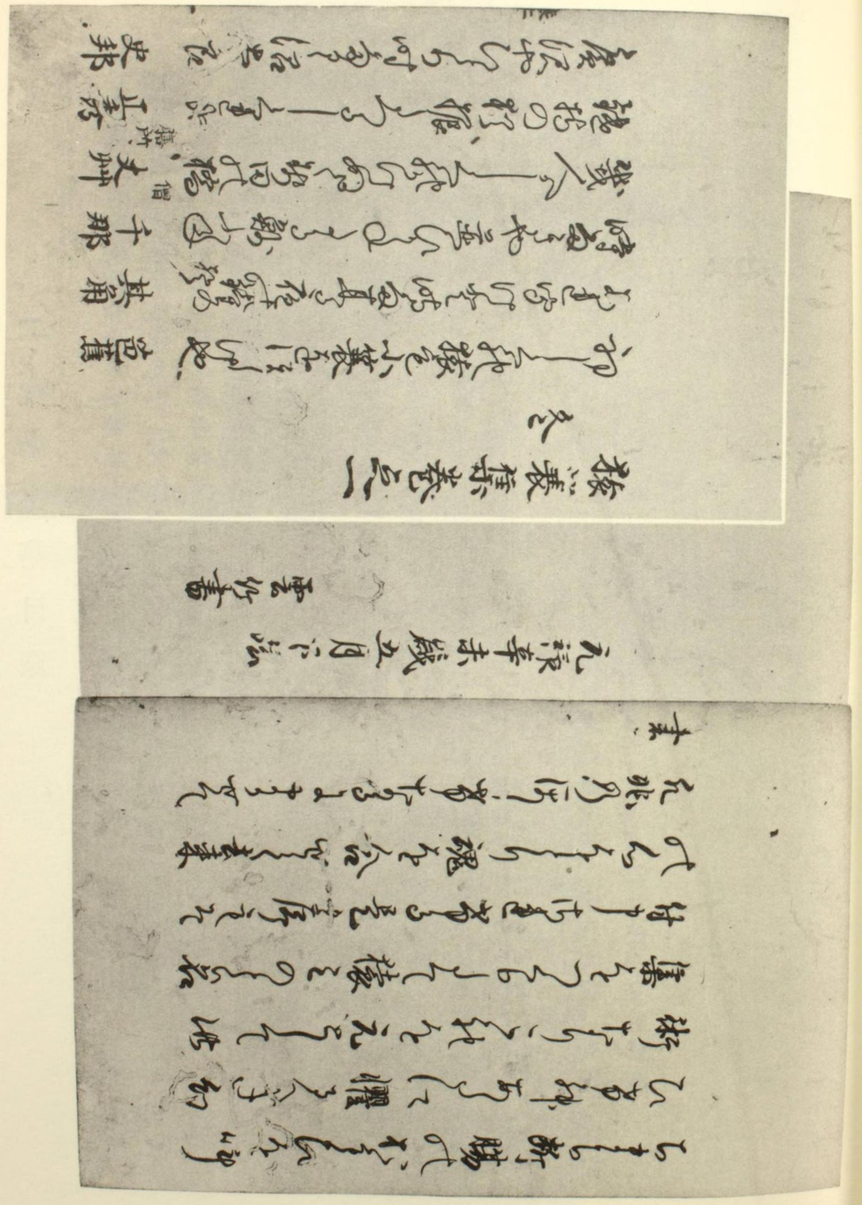
カットは曾良の奥の細道隨行日記、深川出發の條。

鳥の子の巻子本一巻。巻初に鳴海平氏清玩の印記あり、伊賀本とは別に、芭蕉にゆ



かり深い尾張鳴海の下郷家に傳來した去來筆本。奥書の日附が伊賀本に同一であることは、囑に依り、新にもとのまま再寫したものとすべきか。

カットは曾良の奥の細道隨行日記、深川出發の條。



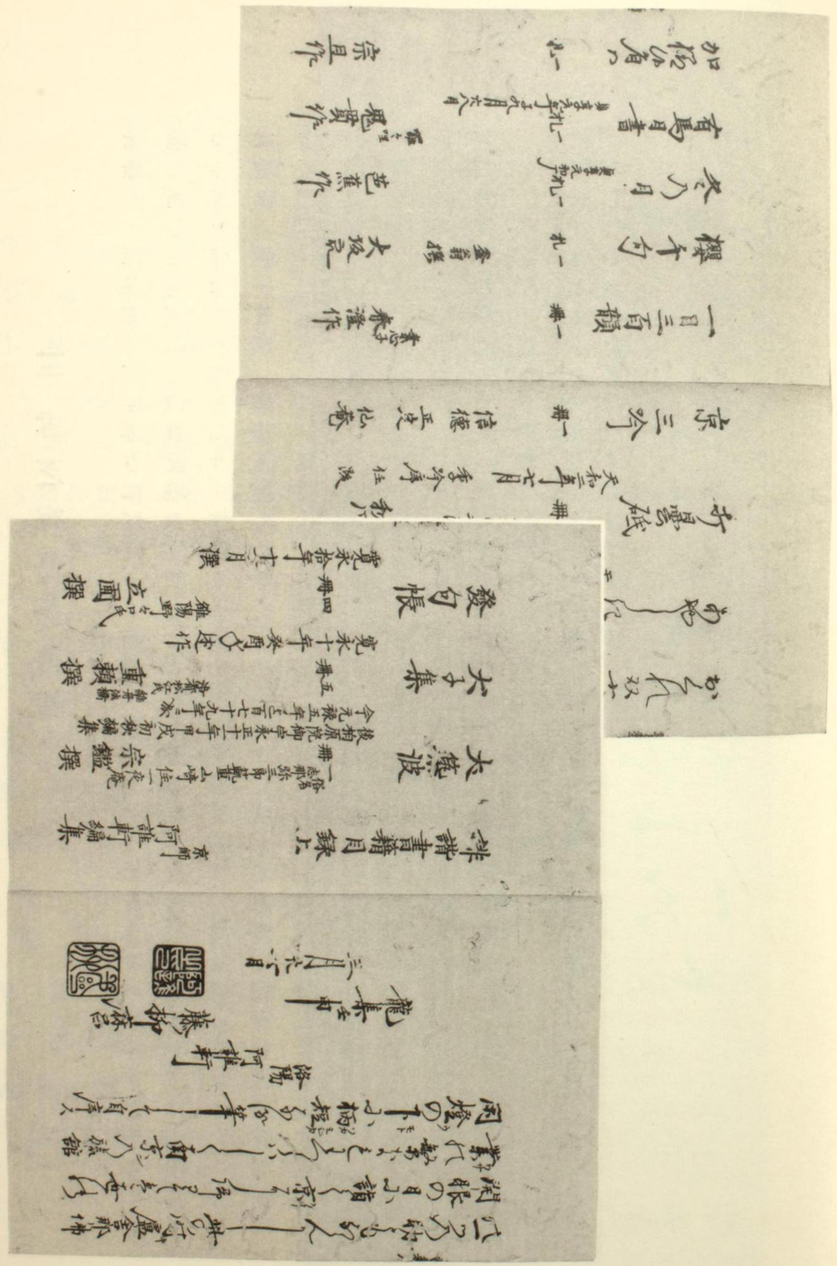
10 猿蓑

元祿三年から四年にかけて、芭蕉は湖南、或は洛西嵯峨に旅寢し、作家として最も豐饒多產の時を過したのである。細道の旅が、芭蕉の人と文學に與へる所頗る多かつたことはいふまでもない。稔つたものを刈る―芭蕉は門人去來・凡兆をして俳諧の集を撰ばしめた。

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　芭蕉

集の名は、右卷頭の句によつて猿蓑といふ。本書編纂に示された、撰者の精進と芭蕉の異常な程の熱情は、去來抄や關係資料の類に詳しく、去・凡の性格や作風の相違、從つて意見の不統一さへもが、却つてよき多樣性にまで高められてゐる。入集の作者群は蕉門の主流を盡くし、乾坤二卷、發句あり、俳諧あり、文章も收め、且つ篇次も冬・夏・秋・春等として平板をさけてゐる。元祿四年五月に終稿し、同七月に刊行された。賣價二匁五分。

半紙本二册。晋其角序、丈艸跋。刊記、京寺町二条上ル丁井筒屋庄兵衞板。板下、序文は、芭蕉の書道の師であつた北向雲竹筆、本文は同門人正竹書。



二　誹諧書籍目錄

俳諧三ツ物所筒井氏井筒屋は、元祿前後以降、俳諧專門の書物所として、天明期に漸く家運衰退する迄凡そ一世紀の間、特に蕉門俳書の版元として繁榮を續けた。俳書目錄の專書は、曩に延寶四年の渡奉公があり、始めの部分はこれにより、以後元祿五年までの刊行書を、冊數・撰者・刊行年月日にわたつて著錄し、概ね時代順に排列したのが本書で、編者の阿誰軒とは井筒屋初代の號である。廣く當時の俳書一般を採錄するが故に、その時々の俳壇を鳥瞰する上に最も確實な材料を提供してゐる。例へば、宗因追善集打曇砥によつて談林の吊鐘を、京三吟は京都新風、櫻千句は大阪談林の餘喘を、更に有馬日書によつて伊丹の鬼貫が誠の俳諧の產聲を―甚だ複雜を極めた天和末貞享初年の俳壇の實態は、この見開き一葉によつてさへも殘る限なく、冬の日が、芭蕉個人の天才にのみよつて生まれたものでないことも銘肝すべきであらう。

半紙本二冊。序文、龍集壬申三月廿七日　洛陽阿誰軒藤柳麿。餘春澄跋。奥書と刊記、追々出來ノ俳集次第ニ摺足(スリタス)者也　誹諧書林（京都寺町二条上ル町井筒屋）筒井庄兵衞重勝板。

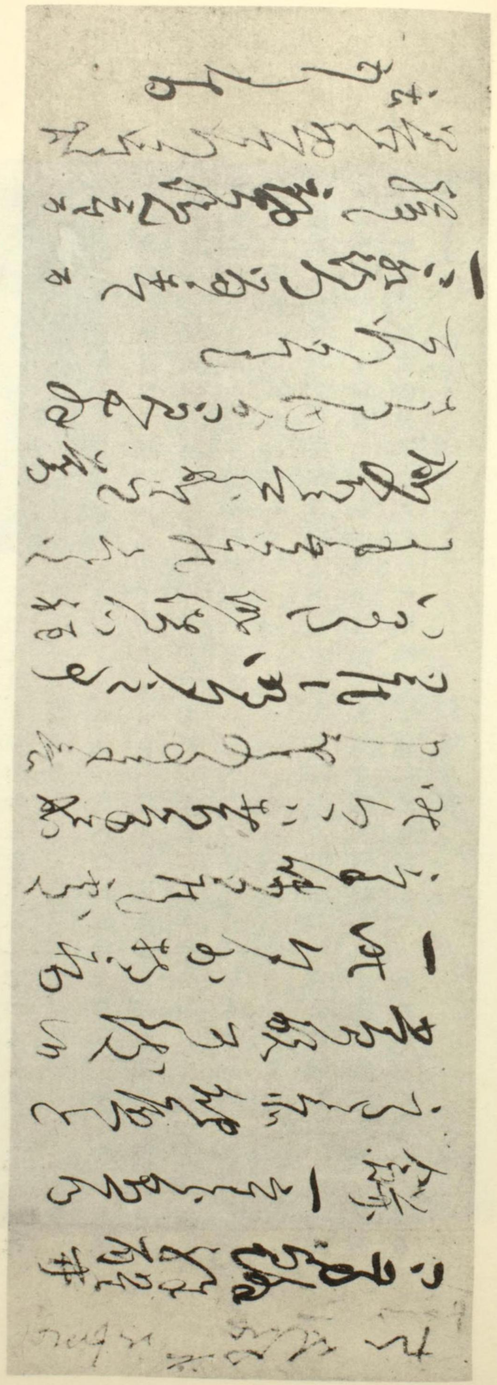
三　雪芝宛芭蕉書翰

元祿七年五月末、三年ぶりに江戸より歸郷、翌閏五月十六日までの約半ヶ月をこの地で過した芭蕉は、伊賀盆地の山河をこよなく懷しみ、故舊門人と會しては心のくつろぎを得たことであらう、彼等と俳諧を語つて旅後病勞の身を厭はなかつた。

本翰は、縱一五糎、横四五糎の狀紙を卷子に仕立て直してゐる。宛書の山田屋七郎右衞門（正徳元年一七一一四二歟）は、廣岡氏、俳號雪芝、伊賀の人で、酒造を業とし、或は芭蕉の緣邊ともいふ。明夕、雪芝亭俳席に招待された芭蕉は、その好意を感謝し、己が近況を報じて、出席の旨を返事した。餅など贈つて、師翁慰問に懸命であつた伊賀門人の溫かい交情がにじみ出てゐる。現在伊賀上野市に傳はる中町の雪芝宅趾と、芭蕉假寓先の赤阪町兄半左衞門宅とは、歩いてつい數丁の距離であつた。

雪芝亭　涼しさや直に野松の枝の形　　芭蕉

これは、雪芝が庭に松を植ゑた時の祝儀句で、書翰に見へる明夕之事とは、恐らくこの野松の會の俳席をさすものであらう。

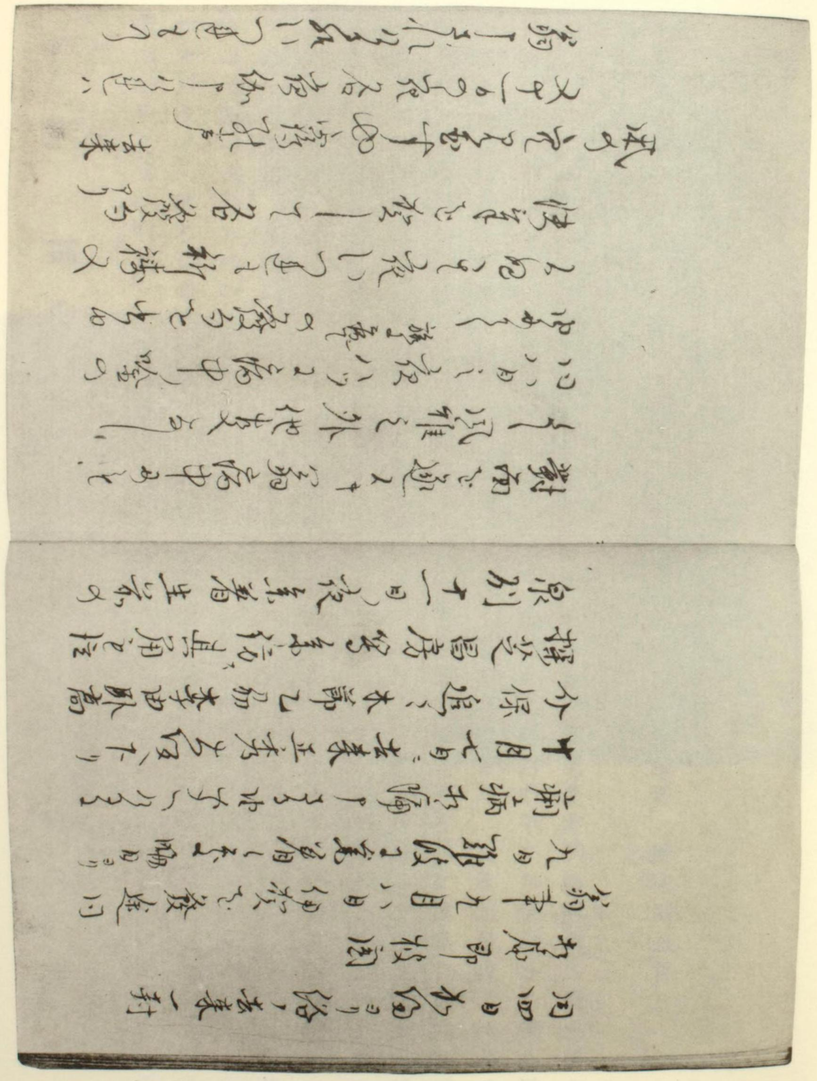


壬五月十日

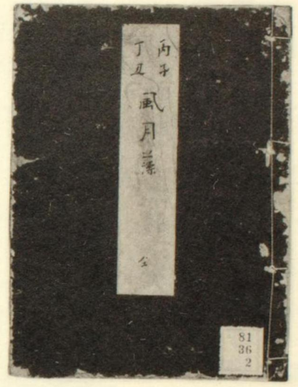
一御申昨氣一賞意餅御
善緩可成にい御
惡ゝ發ゝ句得合ニ無御座
可熟留御ゟ被成候俳明
得御覽置御意見ゝと心之事
以上
候而而候舞葬も程事無成處病候と御井

七郎右衞門樣
やまたや

（紙書）
はせを

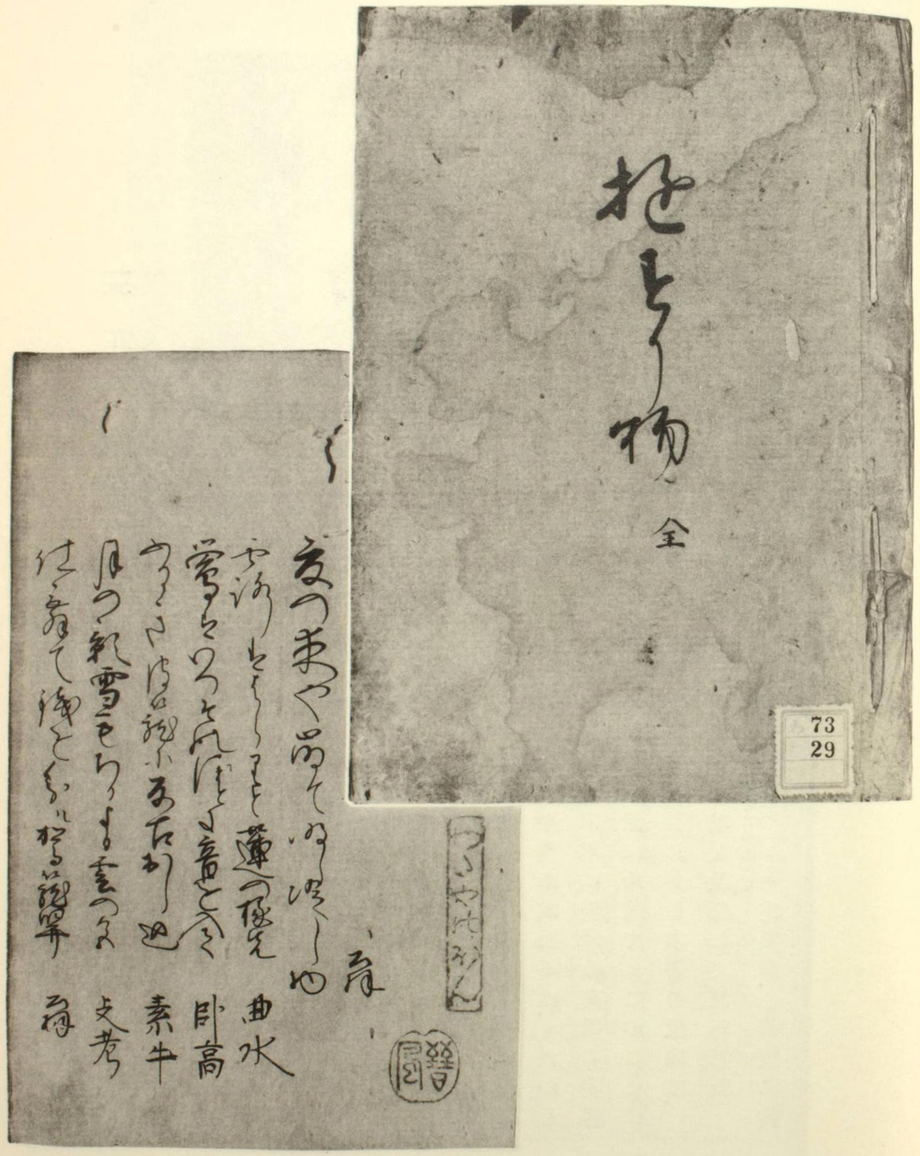


三　浪化日記　集



浪化（寛文一一―元禄一六一六七一―一七〇三）は、東本願寺十四世琢如の子、七歳にして越中井波の名刹瑞泉寺十一代を繼いだ。元禄七年五月、去來の斡旋を以て、折しも在洛中の芭蕉に向對入門したが、それも時の間、この初冬芭蕉の死は、師弟の緣を永久に奪つてしまつた。以後浪化は、去來を通じて芭蕉の俳諧を知らうとする。去來より浪化に與へた書翰の文章は、そのまま去來とも角芭蕉の遺風が、清潔纖細の貴公子と、抄の資料となる程に懇切を極めてゐる。その侍者達聖職の一團によつて、雪深い北陸の片隅にもうけつがれていつた様は、筆まめな浪化の日記―元禄五年以降斷續して書きつがれた半紙本四册の自筆書留集によつて窺ふことが出來る。

掲出本はその初册。元禄五年壬申日記と俗稱されてゐるが、記事の大部分は元禄七―八年のことにかかる。寫眞は元禄七年十二月、加賀を經て届けられた去來書狀の寫。芭蕉の死を報じたその文章は其角の枯尾華等と共に最も詳細で、哀戚の情に滿ちてゐる。カットは第二册元禄九・十年分にあたる丙子丁丑風月藻。

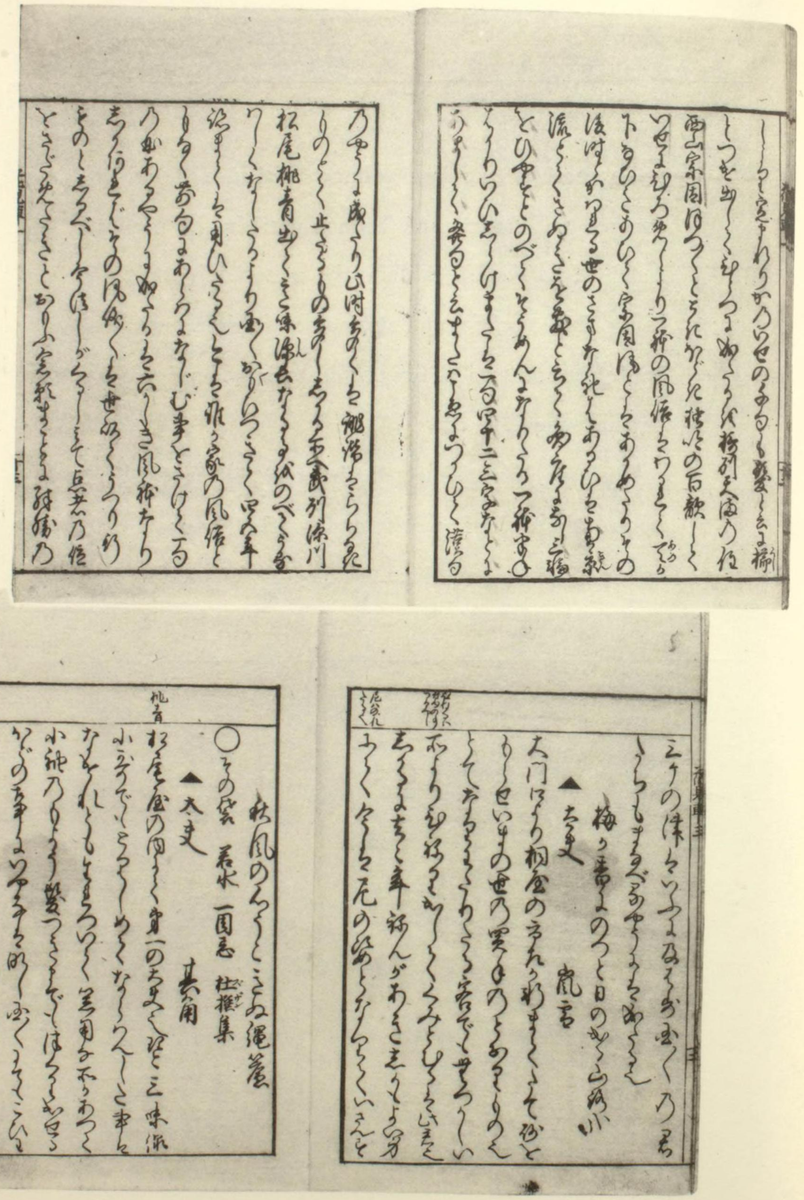


一四　ゆずり物

花につけ月につけて、無數に近く作られた俳諧の、そのどれだけが陽の目を見得たであらうか。刊行の俳書のみで、一應俳諧の歴史は考へられるとしても、寫本の形でしか傳へられなかつた資料が、この方面の學問に無益であるとはいはれない。

元祿八年初頭、支考は亡師を偲ぶよすがにと、芭蕉所縁の地を巡歴し、その三月末、名古屋に杜旭亭を訪ねてゐる。時に支考の旅囊には、土地々々での唱和の俳諧や、各所で採集した芭蕉の遺文も少なからず收まつてゐたことであらう。杜旭は忠實にそれ等を書留めた―書名のゆずり物とは、この意味とも考へられる。芭蕉一座の俳諧歌仙五卷を含め、計二十三の歌仙が、ほぼ年次を追つて記されてある。連中は概ね名古屋・美濃・伊勢に限られ、各座の中心と思はれる者に、支考以外露川があり、資料の提供者のいま一人に彼を考へてよい。所收作品の創作年次は元祿七、同八年夏に及び、芭蕉の到り得た輕ミの俳境と、それに對する田舍蕉門の理會の程を知る好資料である。

半紙本一冊。自筆。奥書、元祿八乙亥無射上旬書之　杜旭管。　無射（ムエキ）は九月。



一五　花見車

轍士（寶永四年一七〇七歿）はその俳歴の示す所、殆ど回國の行脚にあけ暮れてゐるが、その間の見聞に基き、諸國の俳諧點者を、嶋原の傾城に見立てて評判することによつて、元祿後半期俳壇の全貌を巧みに素描した。道聽塗説等による誤傳があるにせよ、自からの見聞による本書には、甚だ鋭利な言辭も乏しくない。

「松尾桃青出て、意味深長なる事をのべてうるはしくなしたるより、國〳〵おもひつきて、四五年跡までは用ひたる也。誰が家の風俗ともなく、前句にあらはになじむ事をさけて、一句の曲あるやうに成たるは、六かしき風躰なり」。例へば右の一條など、芭蕉の意義と、元祿末年に於ける蕉風の姿勢を最も的確に把んだものといへよう。當時の俳狀、談林諸派に冷淡で、このことは西鶴門人の團水を刺戟し、兩者論戰の一幕さへも惹起した。しかし本書の趣向は、一般讀物としてもよろこばれたのであらう、後に俳諧諸國咄と改題して流行した。半紙本、花鳥風月の四册。刊記、元祿十五年三月日　請人　寺町二条上ル町　いつゝや庄兵衞。圖版に其角・嵐雪の太夫とあるのは最上の位といふ意味。

TENRI CENTRAL LIBRARY PHOTO SERIES No. 13

Kohaisho II

Contents

Preface

1 Portrait of Bashō in his traveling kit — Painted by Kyoroku.

2 Kai-ooi — Munefusa. (Bashō)
The first printed book by Bashō.

3 Tōsei-sanbyakuin
Bashō's early *Haikai*-poems in his Danrin-Haikai period.

4 Haikai-awase — Kikaku & Sanpū.
Bashō's critique on his pupils' works.

5 Haikai-jiin — Tōsei. (Bashō)
Bashō's early works in the Shō-fū Style.

6 Haru-no-hi — Kakei.
The second book of "Haikai-shichibu-shū".

7 Shimi-shū — Kikaku.

8 Hitotsumatsu — Shōhaku.

9 Oku-no-hosomichi — Bashō.
Travel Diaries.

10 Saru-mino — Kyorai & Bonchō.
The forth book of "Haikai-hichibu-shū".

11 Catalogue of the books on *Haikai* — Compiled by Asuiken.

12 Bashō's letter to his pupil Sesshi

13 Rōka's diaries on *Haikai*

14 Yuzuri-mono — Tokyoku.
A collection of the *Haikai*-poems.

15 Hanami-guruma — Tesshi.
A collection of goships on the masters of *haikai* poem.

To succeed our last volume, *Kohaisho* I, which covered the Danrin and Teimon periods, the present issue, *Kohaisho* II, exhibits the materials pertaining to the Bashō school and also some of the forerunners and successors to show the historical development of the school.

Here we have collected the rare kind of *haikai* books of standard works and MSS., 15 items in all, and have arranged them in the chronological order.

善本寫眞集

TENRI CENTRAL LIBRARY PHOTO SERIES

I	日本近世名家自筆集 (Autographic documents of Edo-period in Japanese literature)	昭和 28
II	きりしたん版 (The Jesuit Mission Press in Japan)	昭和 28
III	古俳書 I (Kohaisho-I: Materials of early Haikai)	昭和 29
IV	西洋古版日本地圖集 (Early printed maps and atlases of Japan made in Western countries)	昭和 29
V	開館廿五周年記念 稀覯本集 (Collection of old and rare books and manuscripts, the 25th anniversary volume)	昭和 30
VI	滿文書籍集 (Collection of Manchu books)	絕 版
VII	近代作家原稿集 (Collection of Autographic MSS of Japanese novelists and poets from Meiji-Taishō periods)	昭和 31
VIII	小泉八雲集 (Lafcadio Hearn)	昭和 31
IX	日本史籍 (Classics of the History of Japan)	昭和 32
X	泰西日本記集 (Early Western works on Japan)	昭和 32
XI	お伽草子 (Otogi-zōshi: Nursery tales of Muromachi-period)	昭和 33
XII	獨逸文人自筆集 (Autographs of German literati)	昭和 33
XIII	**古俳書 II (Kohaisho-II: Materials of early Haikai)**	**昭和 34**
XIV	百科事典 (Encyclopaedias)	昭和 34

納本

昭和三十四年六月二十日 印刷
昭和三十四年六月二十六日 發行

編輯者 奈良縣天理市 天理圖書館
印刷者 京都市中京區新町竹屋町南
株式會社 便利堂
發行者 奈良縣天理市 天理大學出版部